

国文研ニュース

No.44 SUMMER 2016



短冊手鑑「筆陳」上帖

目次

●メッセージ

断簡零墨の価値と異分野融合研究…………… 池田 和臣 1

●研究ノート

中世の短冊資料の諸問題 -新収の短冊手鑑「筆陳」を中心として- …… 中村健太郎 2
 大坂夏の陣と「乱取り」-真田信繁娘阿梅の行方- ……………… 丸島 和洋 4
 ブリガム・ヤング大学所蔵のブルーニング・コレクションとその調査 …… ジャック・ストーンマン 6

●トピックス

「平成27年9月関東・東北豪雨」における
 常総市役所被災公文書の保全…………… 西村慎太郎 8
 UCBにて初めて「古典籍ワークショップ」を開催
 -三井写本コレクション調査とともに- ……………… 小山 順子 9
 連続講座「くずし字で読む『百人一首』」…………… 小山 順子 10
 『近世大名のアーカイブズ資源研究』とアーカイブズ活動…………… 大友 一雄 11
 <国文学研究資料館展示室より> 特設コーナーにご注目を! ……………… 12
 平成28年度 国文学研究資料館「古典の日」講演会…………… 12
 第40回国際日本文学研究集会…………… 13
 総合研究大学院大学の近況…………… 14

断簡零墨の価値と異分野融合研究

池田 和臣（国文学研究資料館運営委員、中央大学教授）

おもに平安時代から鎌倉時代にかけて書写された冊子本や巻子本の断簡を、古筆切と言う。切れ切れになったひとかけらに過ぎないが、和歌・物語・説話・漢籍・仏典など広きにおよぶ古写本の断片は、尽きない魅力を湛えている。書物愛好家のモノマニアックな対象にとどまらない、学際的で豊穡な可能性を秘めている。

文学および文学史の研究は、本文を読むことに始まる。本文なくして読むことはできず、文学研究は始まらない。そして、古典文学研究者は業のように、作品の成立に少しでも近い、より古い本文を探そうとする。断片とは言え、古筆切には書写年代の古いものが伝存していて、この本文研究の基盤資料として大きな価値をもっている。断片は全体が見えない切れ端ゆえに、「塵も積もれば山となる」可能性を追求する地道な作業を要求される。同一の書物から切断された「ツレ」を拾い集め、その本文系統を明らかにしたり、書物の全体像を復元することは、夢のまた夢かも知れないが、倦まずたゆまず諦めずに拾い集めることが必要である。「塵も積もれば山となる」ような地道な仕事も、資料に向き合うことを基本とする国文学研究資料館なればこそなし得る仕事であろう。すでに精力的に収集し展示も行われているが、願わくば、落ち穂拾いにも手を抜かず、その志の持続されんことを。

また、断片であるにもかかわらずと言うか、断片ゆえにと言うべきか、古筆切は一攫千金の山師的魅力も併せ持っている。本文研究の価値のみならず、わずか一片の断簡から重大な新発見をもたらすことがある。写本が書き継がれなかったり、書かれた写本が火災などで湮滅してしまうと、その作品はこの世から永遠に失われてしまう。失われてしまっても、他の資料のなかに失われた作品の名や情報が残されていて、かつてある作品が存在したと知れることがある。こういう作品を散佚書と呼ぶ。古筆切としてかかる散佚作品の断簡が伝存していて、失われた作品の復元という浪漫的な夢を可能にしてくれる。如意宝集・麗花集・源氏物語古本巢守巻・夜の寢覚散佚部分の古筆切などがそれに当たる。

国文学研究以外にも、古筆切のもつ価値は大きい。仮名の成立・字体の変遷・文字遣い（異体字の選択意識・使用法則）などの国語学的（文字史・表記史）研究、装丁など書籍としてのありようについての書誌学的研究、書芸美についての書道史的研究、料紙の下絵や装飾のありようなどについての美術史的研究など、隣接諸分野にあり渉る豊かな価値を湛えた資料が古筆切なのである。

古筆切は、まさに総合的日本文化研究の対象として、学際的対象として、格好の資料と言って良い。言い方を換えれば、古筆切に対する総合的研究の必要性があるというこ

とである。かかる総合的研究を目指して「古筆学」という学問領域を打ち立てようとしたのが、故小松茂美氏であった。しかしながら、古筆研究は真に異分野融合の総合的学問になっているだろうか。はなはだ心許ない。ややもすると、国文学サイドからはその本文資料の価値のみが取り上げられるにとどまり（時によっては、たんなる些末な資料紹介として軽んぜられることもある）、あるいは書道史・書芸史の研究として遠ざけられたりもする。一方、書道史・書芸史サイドからは、書之美しさに無知な国文学者の本文研究としてやはり遠ざけられる。学際的総合的研究とか異分野融合研究という掛声は、あちこちで声高に叫ばれている。が、実質がともなっているとは思われない。掛声倒れに終わらぬ覚悟が必要であろう。

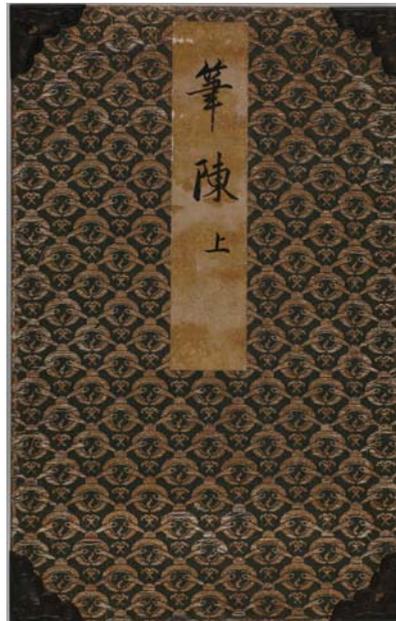
ちなみに、私は名古屋大学宇宙地球環境研究所（旧年代測定総合研究センター）との共同研究として、二十年近くに涉って、古筆切料紙の加速器質量分析法による放射性炭素14年代測定を行ってきた。そもそも古筆切の筆者（書写年代）は伝称にすぎず、ほとんど根拠がない。その正確な書写年代を知らんがためにである。加速器質量分析計と測定法の急速な進歩によって、古筆切なら料紙の余白を1～2ミリの幅で切り出せば充分測定が可能になり、測定誤差もプラスマイナス20年から30年と格段に小さくなった。100点以上の古筆切・古写経・古文書を測定したが、書写年代が判明している20数点は、ほぼ100パーセントで真の年代が誤差範囲に含まれていて、加速器質量分析法の正確度の高さが実証された。また、平安末の書写とされていた伝藤原俊成筆頭広切古今集が南北朝頃、鎌倉初期とされていた伝後鳥羽院筆水無瀬切新古今集が鎌倉末頃で、従来の書写年代の通説を正すこともできた。

しかしながら、年代測定は破壊分析であり文化財保護の観点から認められないという声も聞く。が、加速器質量分析計は0.001グラム（余白の1～2ミリ幅の切り出し）の分量で測定ができる。そもそも古筆切の場合は、すでにばらばらに切断され剥離された断片である。「文化財保護」という美名と「破壊」という言葉のイメージによって、実情に対する客観的認識が阻害されているように思われる。余白1～2ミリの切断で科学的に書写年代が判明することを、「破壊検査」というレッテルによって葬ることのほうにこそ問題があるのではないか。加速器による料紙の年代測定は、高度で正確な化学処理と正確で厳密な数学的処理によってなされる、世界的に認知された方法なのである。加速器質量分析法による古筆切・古文書の年代測定のような研究こそ、真の学際的総合的研究・異分野融合研究なのではあるまいか。文化財の生きた研究を、国が真摯に考える時代なのではあるまいか。

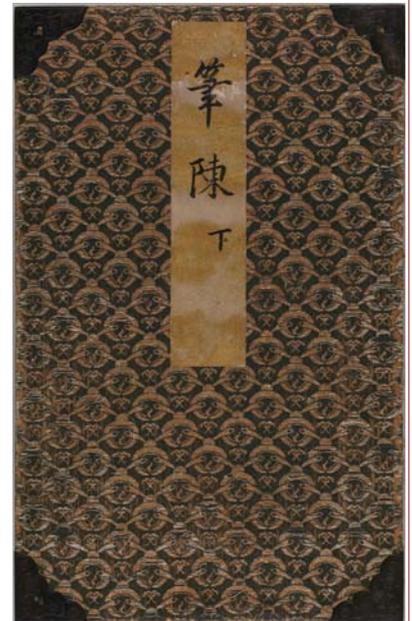
中世の短冊資料の諸問題 —新収の短冊手鑑「筆陳」を中心として—

中村 健太郎（帝京大学短期大学助教）

国文学研究資料館に収蔵された短冊手鑑「筆陳」(上下2帖)は、中世から近世前期までの天皇、皇族、公家、武家、歌人、連歌師など1176点の短冊を所収する短冊手鑑である。長府毛利家旧蔵と伝えられ、近世の大家における収蔵資料としても注目される。過去に、春名好重氏による「和歌の短冊・短冊解説」(『墨美』244号、墨美社、昭和49年)において、所収短冊の一部分(120点)が紹介されたため、その存在は研究者間では知られていた。しかしながら、短冊手鑑の全貌についての報告はなく、個人所蔵の資料として現物の調査が難しい資料であった。現在、新収の短冊手鑑「筆陳」所収短冊の全容と、現物の調査から得られる書誌的情報などについて、共同研究「短冊手鑑の内容と成立に関する研究」として調査を継続している。



短冊手鑑 上帖・表紙



短冊手鑑 下帖・表紙

短冊資料の問題点

短冊は、自詠自筆の資料が多く含まれていることから、文学研究において重要な研究対象といえる。また、筆跡や料紙装飾などから、美術史学や書道史学など、関連する他の研究分野においても注目されてきた。しかしながら、現存する中世の短冊資料だけでも膨大な点数であることが予想される。いち早く集成の試みが行われた古典籍の断簡である古筆切資料は、現在多くのデータの蓄積が続けられている。一方、短冊資料はこうしたデータベースのような集成の試みはなされていない。また、研究対象として取り扱う際の問題点も少なからず指摘される。短冊の書誌的な検討や、短冊自体の真贋問題など、研究資料としてそのまま取り上げることが難しい資料であるともいえる。研究者が容易に研究資料として活用できる状況にないことが、短冊研究の大きな課題であると思われる。

こうした観点から、共同研究における成果の一端として、中世の短冊資料の具体的な検討事例について現段階での報告を行うものである。

白短冊の再検討

短冊に和歌を認める古例として、鎌倉時代後期から南北朝時代にかけて、白短冊と呼ばれる無装飾の白紙に和歌が書かれた形式の一群が存在する。室町時代に定着する雲紙(藍と紫の漉き染め料紙、内曇紙とも)を短冊料紙として使用する形式より古いものとされ、江戸時代の短冊収集でも白短冊は特に重視されてきた歴史を持つ。そのため、すでに江戸時代から一部で偽筆や改変などが行われた可能性が十分考えられる。

『筆陳』に所収の白短冊も、一部改変などの手に加えられた可能性が考えられる白短冊の資料が含まれており、現在詳細な検討を行っているところである。後宇多天皇〔図1〕や後伏見天皇〔図2〕など、鎌倉時代後期の天皇を筆者にあてる白短冊の資料に、本来卷子本の典籍の一部を切り出し、短冊の書式に本紙を切継ぎ、改変した可能性を視野に入れ再検討を行っている。本来の白短冊と、後世に改変が加えられたものとを判別するためには、やはり資料を直接調査することが必要不可欠である。

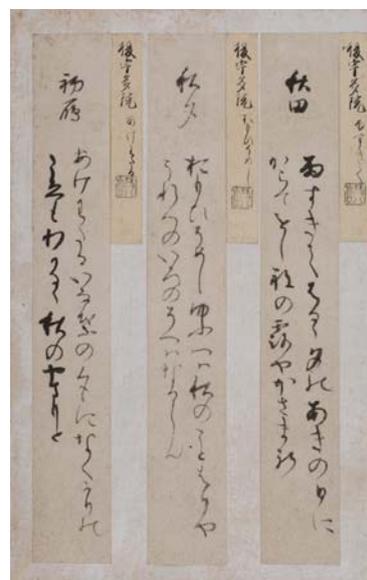


図1 伝後宇多天皇筆

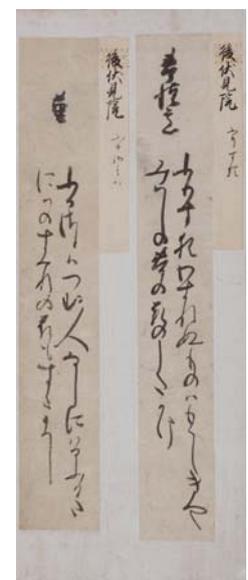


図2 伝後伏見天皇筆

後世における下絵装飾の加筆

金泥や銀泥などを用いて下絵を施した装飾料紙の和歌短冊は、室町時代以降、多くの作例が確認される。こうした下絵装飾のある短冊は、料紙装飾の資料としても注目されている。短冊手鑑「筆陳」にも、下絵装飾の料紙を使用した短冊が多数含まれているが、一部に本来の下絵装飾ではない短冊資料が確認される。今小路秀盛筆和歌短冊〔図3〕は、一見すると金泥で下絵装飾を施した短冊料紙に和歌を書いたもののように考えられた。しかし、詳細に本紙を観察すると、墨で書かれた上句「庭の草むら露ふかみ」の文字部分を意図的に避けて下絵が書き込まれている。本来、下絵のない短冊料紙に和歌を認めたものであったが、後世に金泥で下絵が書き加えられたものであると推定される。こうした下絵の加筆は、後絵（あとえ）とも呼ばれ、江戸時代に鑑賞性を高める目的でなされたものが確認できる。下絵の有無はもちろん、下絵が施された短冊であっても、本来の下絵かどうか判別することが重要である。

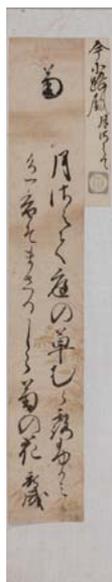


図3 今小路秀盛筆

歌合短冊の例

通常の和歌短冊の書式では、上部に歌題、その下に和歌（二行書）、左下に署名となる。この書式に加え、短冊右端上部に細字で番号や左右等の墨書がみられるものが確認される。短冊手鑑「筆陳」所収の佐伯英継筆〔図4〕や、円照房正家筆〔図5〕の短冊が該当するが、これは短冊を用いた歌合に実際に使用された歌合短冊の実例と考えられる。歌合は、左右で歌を結番させて、和歌の優劣を競うものである。こうした歌合に、和歌短冊が使用された証拠となるものである。中世の歌会や歌合などの場で、短冊がいかに使われたかを考えるとき、こうした短冊の存在は大いに注目される。

短冊手鑑「筆陳」所収の短冊資料ではないものの、歌合短冊の例としてとして調査を実施した個人蔵の正

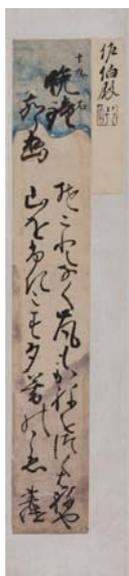


図4 佐伯英継筆

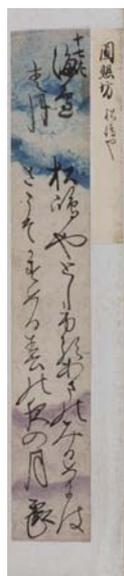


図5 円照房正家筆

広筆歌合短冊〔図6〕を最後に見てみたい。この短冊の和歌は、正広の家集である『松下集』に次のとおり記載が確認できる。

二十八日、禅通寺の塔頭にて、常全興行にて三首歌合ありしに
 千鳥過橋
 心なく衣かたしくはし姫にわかれてわたる友千鳥かな (1851)
 依忍増恋
 わが思ひます田の池の蜚かなそれも初は声や立てけん (1852)
 山亭松嵐
 さわぎふく嵐をしらで松がもとかりにもなどか庵しめけん (1853)

三首目の歌題と和歌の一致から、延徳3年(1491)12月28日、善通寺の塔頭における歌合に正広が出詠した三首の和歌のうち、山亭松嵐の題で詠まれた和歌一首にまさに該当することが確認できる。また、短冊の右端上部の小さな墨書注記「十一 右」〔図7〕から、短冊を使用した歌合の形式で、十一番の右に結番されたことが判明する。歌合が終わり、用いられた短冊はまとめて上部に穴を明け、紙捻を通して綴じ、一括して保存されたものと推測される(本短冊にも歌題の上部に綴じ穴の痕跡が確認できる)。その後、江戸時代の短冊鑑賞の需要に応じて、一括で保管されていた歌合短冊は一点ごとに分割され、今日に伝えられたものと考えられる。和歌が詠まれた年次や、出詠の状況、歌合の催行場所などが特定可能な例として貴重な歌合短冊といえよう。

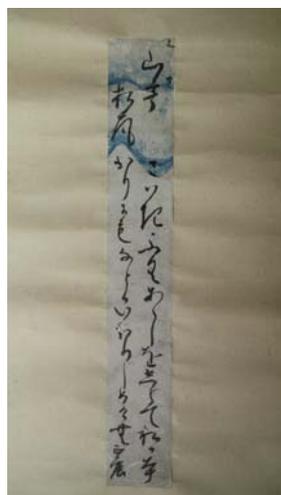


図6 正広筆



図7 正広筆短冊 拡大

大坂夏の陣と「乱取り」 — 真田信繁娘阿梅の行方 —

丸島 和洋（国文学研究資料館特定研究員）

慶長20年（1615）の大坂夏の陣は、戦国の世に幕を引く戦いとなった。そこにおいては、真田信繁や後藤基次、毛利勝永といった大坂方諸將の善戦が広く知られている。薩摩島津氏が国許に送った書状の案文にある「真田日本一の兵、いにしへよりの物語にもこれなき由、惣別これのみ申すことに候」（「島津家文書」）という文言は、英雄「真田幸村」伝説の苗床であった。

しかし信繁の勇戦をはじめとする「英雄譚」の陰には、過酷な現実が存在した。豊臣一族滅亡の悲哀ではない。落城後に繰り広げられた「乱取り」である。そしてそれは、信繁自身にも関わりのある話であった。

戦国期の戦場において、「乱取り」「乱妨取り」と呼ばれる「奴隷狩り」が日常的に行われていた事は、広く知られた話であろう。略奪された男女は下人（隷属）身分と扱われ、場合によっては海外に売り飛ばされることすらあった（藤木久志『新版 雑兵たちの戦場 中世の傭兵と奴隷狩り』、朝日選書、2005年など）。メキシコにまで売り飛ばされた少年がいたことは、近年新聞記事になったから、記憶にも新しいのではないか（2015年5月13日読売新聞夕刊、ルシオ・デ・ソウザ氏および岡美穂子氏の研究による）。

「乱取り」は、「元和偃武」を実現したはずの大坂夏の陣においても行われている。黒田長政が作成させた「大坂夏の陣図屏風」（大阪城天守閣所蔵）左隻には、葵の御紋をつけた徳川兵が、嗚咽する女子供を連れ去っている様子が活写されている。「戦国のゲルニカ」などと呼ばれるが（渡辺武『戦国のゲルニカ』、新日本出版社、2015年他）、黒田長政にとって、それはごく当然の光景であったのだ。

この点に早くに着目されたのは高木昭作氏で、東京大学史料編纂所架蔵謄写本『大坂濫妨人并落人改帳』（架番号2040.5-76）をもとに、大坂の陣における「奴隷狩り」を論じている（「乱世」、『歴史学研究』574号、1987年）。同写本は奥書から「蜂須賀家文書」を底本としたことがわかり、『大日本史料』12編之20（369～396頁）、『新修大阪市史料編』5巻大坂城編（679～693頁）などに収録され、その後も広く活用されてきている。

一連の研究によれば、慶長20年（1615）5月12日、江戸幕府が出した「落人改」令において、戦場となった大坂以外での「乱取り」は非合法とされ、「人返し」が命じられた。そこで蜂須賀至鎮は、家臣が行った「乱取り」対象はいずれも大坂居住者で、「合法な」行為であることを示すため、上記帳簿を作成したと評価されている。

この写本の底本は、国文学研究資料館所蔵「阿波国徳島蜂須賀家文書」中の『大坂濫妨人・落人改之帳』という竖帳である（請求記号27A1-00706）。しかし同史料は、『大坂濫妨人之帳』（請求記号27A1-00705）と一括してひとつの

紙袋に納められている。したがって『大坂濫妨人・落人改之帳』だけではなく、『大坂濫妨人之帳』もあわせて検討する必要があるだろう。

小考では、両帳の史料的性格を再検討するとともに、大坂夏の陣における「乱取り」が、「日本一の兵」真田信繁周辺にも及んでいた様子のみをみることとしたい。

『大坂濫妨人・落人改之帳』は表紙に「松平阿波守」（蜂須賀至鎮）とあるが、奥に署判しているのは太田勘四郎茂政・篠山加兵衛家忠・武市十左衛門尉（実名読めず）・山田織部（同前）・細山主水政慶という蜂須賀家臣である。五人とも花押を据えている点を考えれば、控書とは考えがたい。日付は、慶長20年6月12日となっている。

二部構成となっており、前半が「濫妨人之分」つまり「乱取り」された者、後半が「落人之分」つまり「落人狩り」された者の交名である。間には白紙丁があり、明確に区別されていたことがわかる。

一方、『大坂濫妨人之帳』は表紙だけでなく奥の署判も「松平阿波守」であり、花押は据えられていない。したがってこの帳は、控書と思われる。内容は、『大坂濫妨人・落人改之帳』のうち「濫妨人之分」を転載したもので、「落人」については記されていない。日付についても、同年6月16日付と相違する。また、紙数が23枚と最後に記され、同帳がここで終わりであることを示している。

したがって『大坂濫妨人・落人改之帳』が蜂須賀家臣による「乱取り」「落人狩り」された者の調査報告であるのに対し、後者は蜂須賀至鎮の責任で作成されたものである。日付のずれからみて、まず蜂須賀家臣が『大坂濫妨人・落人改之帳』を作成して蜂須賀至鎮に報告し、そこから「濫妨人之分」のみを抜き出した『大坂濫妨人之帳』が作られ、至鎮が幕府に提出したとみるのが自然である。その際、同時に作成した控書が、一括して保存されたものと思われる。

「濫妨人之分」のみを幕府に報告したのは、先学が指摘するように、蜂須賀氏の「乱取り」対象が大坂在住者（つまり戦場にいた者）のみだということを示すためであろう。「落人狩り」については、いわば「戦犯」を捕らえたわけだから、蜂須賀氏は褒められこそすれ、咎められる危険はない。

しかし蜂須賀至鎮は『大坂濫妨人之帳』作成にあたり、そのまま転載してはいない。両帳とも、誰が誰を「乱取り」「落人狩り」したかを記したのだが、『大坂濫妨人・落人改之帳』ではたとえば「細山主水所ニ有之者」とある記述が、『大坂濫妨人之帳』では「細山主水正預り」に書き替えられている。つまり、蜂須賀氏は幕府に帳面を提出するにあたり、「乱取り」対象者を「預かっている」と表現を改めているといえる。蜂須賀至鎮は、幕府の許可が下りるまでは、「乱取り」対象者を「下人」と扱ってはいないという姿勢をみせ

たのではなからうか。

より重要なのは、『大坂濫妨人・落人改之帳』では「濫妨人之分」の合計は男91人・女102人の193人としているのに対し、『大坂濫妨人之帳』では男82人・女95人の合計177人と人数が減っている点である。この数字は、『大坂濫妨人・落人改之帳』に貼り付けられた大型の付箋に「本帳之跡書」つまり「清書本の奥書」と記されているものと同一である。ここからも『大坂濫妨人之帳』こそが幕府に提出された報告書の控書とわかる。

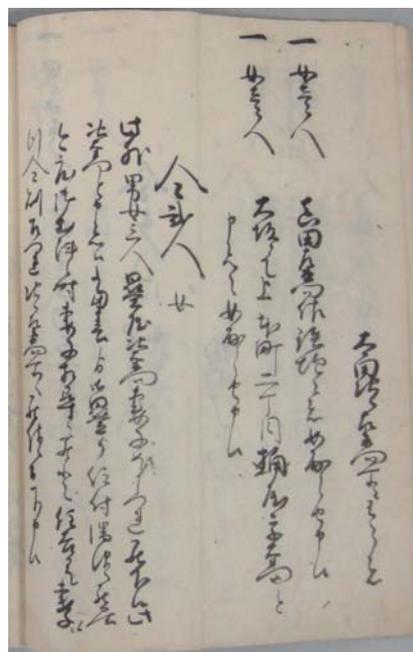
したがって蜂須賀氏は報告書を幕府に提出するにあたり、16人を交名から削除したのである。両帳を比較すると、『大坂濫妨人・落人改之帳』には一つ書の上に○印が付されている者がおり、その人物は『大坂濫妨人之帳』には記載が無い。もっとも○印がなくても削除されている者もあり、実際には18人が削られている。それらの人物の注記をみると、こつま村（勝間村、現大阪府西成区）・堺・かなた（金田、現堺市）・河内王子村などがある。「戦場」に含まれない地で「乱取り」したものを除外したのだろう。ただし他所から商売に來ただけでも、大坂で捕らえた者はそのまま書き上げている。あくまで、「乱取り」した場所が問題であったのだ。なお、負傷により大坂から暇をもらい、蜂須賀氏に奉公を望んだという者も除外されている。「乱取り」対象と扱うべきではないと考えたのかもしれない。

したがって、『大坂濫妨人・落人改之帳』の記載が「乱取り」の実情、『大坂濫妨人之帳』は幕府に対する公式見解ということになる。この除外された18人が解放されたのか、幕府に隠して「下人」と扱ったのかはわからない。いずれにせよ蜂須賀氏は、幕府の法度に沿った情報のみを申告したとみるべきだろう。

また蜂須賀氏は、「濫妨人之分」と「落人之分」を明確に書き分けている。両者に共通するのは、①性別、②成人か子供か、③捕らえた場所、④主君または夫・親が誰か、⑤子供の場合は年齢である。しかし「濫妨人之分」には、捕らえた者およびその夫・親の名は一切記されない。彼らはあくまで「下人」なのであり、主君を除けば、名前など不要であった。「乱取り」被害者が、「財産」と扱われたことを象徴していよう。これに対し、「落人之分」は名前から書き始められている（妻子の場合は夫・親の名前）。「戦犯」を捕らえたのだから、誰なのかが重要な情報であった。「乱取り」された者と「落人狩り」された者には、大きな格差が存在したと言える。もっとも、「落人狩り」された者は処刑対象たりうるのだから、人間扱いされたからよいというものではないのだが。

さて、「乱取り」された者のなかには、真田信繁の関係者

も存在する。太田次郎左衛門が捕らえた女は、真田信繁の鉄砲衆の女房であった。木戸次右衛門が捕らえた男は、紀伊出身で、真田氏に草履取りとして仕えていた者であった。蜂須賀氏に捕らえられた者だけでも2人いるのだから、信繁の奉公人やその家族には「乱取り」された者が少なかつたのだろう。



『大坂濫妨人・落人改之帳』（27A「蜂須賀家文書」706-03）
右側に「真田左衛門佐鉄炮之者女房」とある

そこで想起されるのが、信繁息女阿梅である。

彼女は後に伊達家臣片倉重長の継室になる女性であり、信繁が重長を見込んで保護してもらったとする史料もある。しかしながら、信繁は妻室を連れて大坂に入城している。どうして多数の子女のうち、阿梅だけを預けたのだろうか。正室竹林院殿（大谷吉継娘）は、供侍3人に護られながら紀伊に落ちのび、そこで捕らえられているのである。

片倉氏の正史『片倉代々記』によると、重長は戦場で阿梅を「得」たが、誰かわからず、侍女として召し使っていたという。その後、信繁の娘と判明し、継室に迎えたとしている。それを聞いた「三井奉膳」なる信繁旧臣が、阿梅を頼って片倉氏に仕えたという。九度山から付き従って大坂に入城した信繁重臣に三井豊前守がおり、信繁と同日に討ち死にしている（蓮華定院『過去帳日牌信州小県分第一』）。音通からして、その子であろうか。

同様の伝承は真田氏側にも残されている。真田家臣白川氏の覚書によれば、「左衛門様息女を政宗殿家来片倉小十郎乱取にいたし、妻二仕候由」を、信之の孫幸道が伊達氏を訪ねた際に聞いたというのだ（『左衛門佐君伝記稿』所引『白川家留書』、『新編信濃史料叢書』18巻56頁）。

大坂の陣における「乱取り」の惨状を踏まえれば、阿梅は「乱取り」されたと考えるのが自然だろう。『片倉代々記』は率直にそれを記していると思われる。これこそが、「元和偃武」を実現した戦場の現実であった。

ブリガム・ヤング大学所蔵のブルーニング・コレクションとその調査

ジャック・ストーンマン (ブリガム・ヤング大学准教授) jackstoneman@byu.edu

ブルーニング・コレクションの紹介

ブリガム・ヤング大学 (米・ユタ州) のハロルド・B・リー記念図書館には、50年間眠っていた日本古典籍のコレクションがある。百万塔陀羅尼などの古版から江戸の版本・絵巻・写本・地図、版画・絵画など、仏教・武家・故実・詩歌・黒船・漂流記・国際交流などにわたる幅広い内容のものが400点ほど所蔵されている。そのほとんどは1人のコレクター、ハリー・F・ブルーニング (1886 - 1975) の旧蔵で、弊学図書館に収蔵されたのは1965年のことであった。図書館に日本の古典籍が眠っているという噂は代々の教員も聞いていたものの、1989年まで目録も存在しなかった。コレクション全体が目録化された後も、書誌学や古書に関心を持つ教員や学生がなかなか現れず、2004年までほとんど手付かずの状態が続いたが、その年に2人の教員が展覧会とシンポジウムを企画し、その際には当時大学院生であった私も幸いにして参加することができた。その後、ブリガム・ヤング大学に助教授として着任し、古語の授業を担当するようになった。古語の授業では、古典文法はもちろん、くずし字・変体仮名・歴史的仮名遣いなども教えているが、着任後1年ほどたって、テキストだけではなく、古典籍の実物を手で持って、実際にそれを見ながら昔の日本語と日本文化を学習してもらいたいという希望を抱くようになり、弊学の日本古典籍コレクションを対象として、学生と協力して翻刻などに取り組み始めた。

それから十年…。江戸初期頃に書写された奈良絵巻『うらしま』の翻刻も完結し、その後は図書館内のギャラリーで武士文化に関する展覧会を行うために武家関係の版本・写本・卷子などの翻刻と翻訳を学生とともにに行った。展覧会は去年の秋学期に無事終了し、次のプロジェクトは、この日本古典籍コレクションを紹介する図録とサイトの作成に移った。その準備として、コレクションの全貌を把握するため、1点1点を直接見て調べ、資料の評価についてのコメントを付したデータ作成をしている。本コレクション所蔵品の基本的情報や歴史的背景、また、その希少性などを調べるためには、国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースや館蔵和古書目録データベースは欠かせないものである。

ブルーニング・コレクションの調査と教育

昨年からは毎学期の古語の授業に、「ブルーニング・コレクションの調査」という課題を設け、2週間ごとに1人の学生に1点の本・絵・地図などを割り当てて調査を担当させている。本学図書館のデータベースに登録されている既存の書誌情報を参考にしながら、1点ずつ調査している。書誌学的な情報、関係する人物 (著者、絵師など)、その歴史的背景などの情報も調べている。時には蔵書印など古典籍の伝来に関わる情報も調べながら、本学図書館の記録の誤

りの有無も確認している。

調査の際には、他のコレクション所蔵品との比較は大切な作業である。たとえば、版本などでは世界各地の図書館や研究所に同一書目が所蔵されていることがあり、中にはデジタル化された画像がwebに公開されている例もある。写本でも、同一のものではなくとも、類似の写本が見つかることもある。世界各地の図書館・美術館・文庫などの書目情報と比較することで、本コレクション所蔵の書物の希少性が確認できる。この作業に最も有益なのは国文研のデータベースである。学生はこのデータベースを使い、たくさんの情報を確認する。そして、本コレクションの古書が他のデータベースや目録の情報と本当に一致しているのかどうかを確認するため、準備調査が終了すると2週間ごとに図書館で実物の閲覧と調査を行う。実物を見て調べることによってわかることがいくつかある。本学図書館の記録と書物に附された刊記などの出版情報に不整合はないかを確認し、国文研のデータベースと対比することで、初版、後刷などの詳細な情報を確認することができる。さらに他機関所蔵品の画像が公開されていれば、保存状態や校異の比較も可能となる。

学生が集めた情報は全て書き留めてもらっているが、他機関所蔵の書誌情報の調査と実物の閲覧の両方を行うことによって豊富なデータを蓄積することが出来る。1点の調査が終われば次の1点を割り当てる。1学期1人10点ほどのゆっくりしたペースでの調査だが、学生にとっては大変に難しい課題であり、大したものだと感心している。ブリガム・ヤング大学では、教員や院生だけではなく、学生も積極的に研究に参加させるという方針で、研究プロジェクトのペースはゆっくりでも、学生時代にこのような学術的研究の体験をさせたく思っている。

国文学研究資料館のデータベースの活用

国文研のデータベースを利用するメリットの例として、本学図書館所蔵の『大般若波羅蜜多經』(折本3帖 (第268、483、360巻))を紹介したい。図書館の既存の記録には情報が余りに少なく、開版などの出版の事情もカタログの記録からは理解するのは困難であった。その上、図書館の記録には、「刊記はないが、巻末には『永徳三年』と墨で書かれている。これはおそらく後代のディーラーが書いたものだろう」と記されていた。本学図書館の日本古典籍コレクションの目録の作成者は、1989年の当時に比較文学を専攻していた大学院生であった。目録には、これらと同じ趣の記事が散見する。とくに、古い時代 (平安・中世) のものの制作年代に不審を抱く例が多い。

なるほど、偽物かと半信半疑で実物を閲覧すると、やはり、綺麗な料紙と銀界の線がキラキラしているのも南北朝時代とはとても思えないと、そう思い込んだ (写真1)。そ

の後、国文研のデータベースで調べたところ、永徳3年(1383)の『大般若波羅蜜多經』が検索された(書誌ID 200020780)。しかも、画像を見ることもできた。その画像を見ると、なんと本学図書館の『大般若波羅蜜多經』と同じ表紙で銀界も文字も墨書きの識語もすべて一致していた。そして、巻首2ヵ所に押されている蔵書印も同じ「春翠文庫」であった。国文研の蔵書印データベースを検索すると、収集家の中島仁之助の印だと判明した(写真2)。中島旧蔵の『大般若波羅蜜多經』が、2帖はブリガム・ヤング大学に、1帖は国文学研究資料館に分かれて所蔵されていることが判明したのである(残りの一帖の巻360は文明6年(1474)ごろのものだと後に判明した)。これは本物だと気づき、他の図書館・文庫などを探し求めると、大英図書館にも僚巻が所蔵されていた。結局、弊学と国文研と大英図書館の『大般若波羅蜜多經』はみな永徳3年のもので、しかも但馬国の大乘寺に施入された装飾経だということが明らかになった(なお、龍門文庫、石井積翠軒文庫、鶴見大学、スペンサー・コレクション、チェスター・ビーティ図書館

などにも同じ永徳3年奉納の『大般若波羅蜜多經』が所蔵されている)。

本コレクションのこれまでの調査で、多種のデータベース、オンラインや印刷物の書目・目録、オークション図録などを資料として扱ってきたが、やはり国文研のデータベースは情報が揃っていて使いやすく、最も頼りになる情報の窓口である。著書の詳細な情報が読みやすいこと、画像の有無がすぐわかることなど、利用者の便宜を図った構造にもなっている。もちろん、国会図書館、早稲田大学、Webcatなども、学生たちは利用しているが、総合的には国文研のデータベースが使いやすいという。Worldcat.orgという世界の図書館の記録を集めたデータベースも利用してはいるが、それは西洋(とくに英語圏)の書誌情報の様式で作成された情報システムなので、和書の特有の情報や様式がそのシステムとは食い違い使用しづらいことがある。その上、日本の図書館はWorldcatで検索できる例は多くはなく、また西洋の文庫や美術館なども検索は難しい。一つのデータベースで全世界の和古書の所在がすぐに確認されるものは現時点では存在しないが、国文研のデータベースは現時点では最もそれに近い。日本の国書総目録のデータも最新の調査のデータも、コーニツキー版欧州所在日本古書総合目録もあることで、日本国内やヨーロッパの所在情報が検索できる。アメリカの機関の書目も入れれば、さらに情報の整ったデータベースとなるだろう。

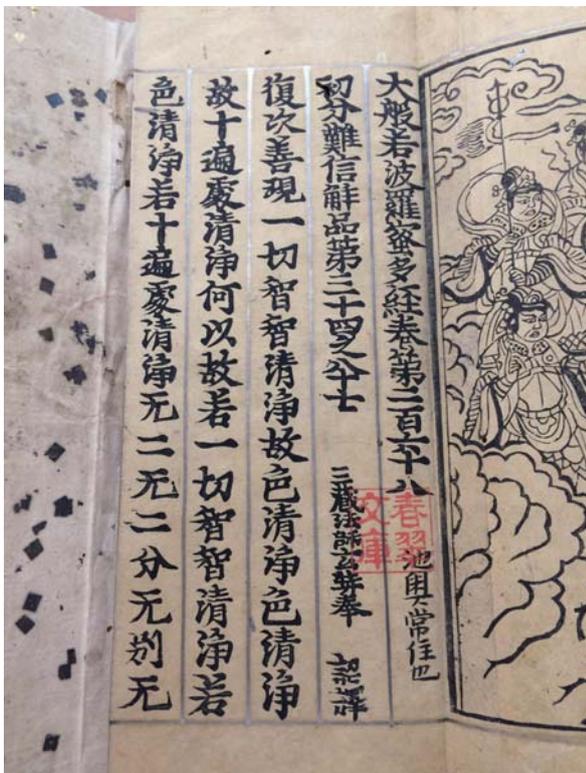


写真1. ブリガム・ヤング大学ハロルド・B・リー記念図書館蔵『大般若波羅蜜多經』(巻第268) 扉絵と巻首

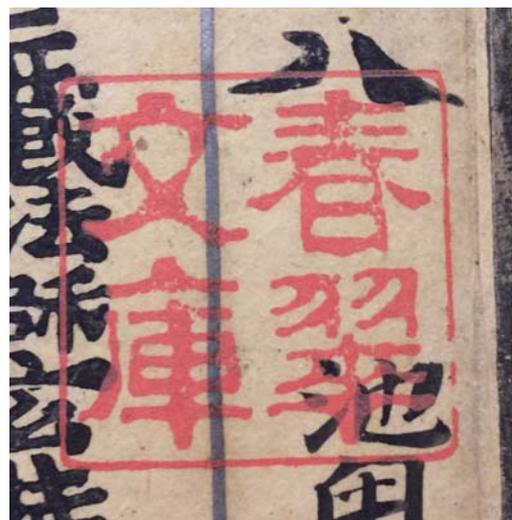


写真2. ブリガム・ヤング大学ハロルド・B・リー記念図書館蔵『大般若波羅蜜多經』(巻第268) 蔵書印「春翠文庫」(中島仁之助)

付記 2016年3月25日～26日に、ストーンマン氏の主催でブリガム・ヤング大学(BYU)において、「Discovering the Japanese Collection at Brigham Young University: Symposium and Workshop」と題したブルーニング コレクションとBYU所蔵の日本古典籍をテーマとした国際会議が開催された。北米地域、日本からも研究者が参加し研究報告と討議が行われた。また、同コレクションの原本を前に、原本を確認しつつその特質や意義を考えるワークショップも開催された。多くの参加者を得て盛況な会議であった。(海野)

「平成 27 年 9 月関東・東北豪雨」における常総市役所被災公文書の保全

2015年9月に発生した台風18号は東日本各地に大きな被害をもたらし、3県18市8町に災害救助法が適用され、激甚災害に指定された。9月10日、大雨のために鬼怒川の堤防が決壊した茨城県常総市では全壊53軒、床上・床下浸水3217軒に及び(常総市ホームページ「関東・東北豪雨による被害状況について」。2016年5月20日更新)、農地には瓦礫や土砂が流入した。町の中心部にある常総市役所も浸水してしまい、その復旧にはかなりの時間を要することとなった。

市民の生存を根拠づけるための公文書も浸水の被害を被った。市役所敷地内にある永年書庫内に浸水して、書棚6段のうち下から3段目までの公文書が水損した。それらについては9月22日、白井哲哉筑波大学教授より筆者に連絡が入り、公文書が深刻なダメージを蒙っていることを国立文化財機構アソシエイトフェローの吉原大志氏(歴史資料ネットワーク事務局)と当館青木睦准教授に連絡し、今後の対応を相談した。青木准教授は東日本大震災の釜石市役所公文書保全の方法論を踏まえつつ、すぐにレスキュー体制を整備し、9月30日から作業を開始することとなった。作業は、常総市より文化財防災ネットワーク推進本部に支援要請したことを受けて、国立文化財機構・国文学研究資料館・国立国会図書館・全国歴史資料保存利用機関連絡協議会をはじめとして、国立公文書館・茨城史料ネット(茨城県内外の民間所在資料保全に従事している団体。主に茨城大学の教員と学生によって構成されている)・茨城県立歴史館や多くのボランティアの方々によって始まった。

その手順は、公文書を永年書庫から搬出し、水損していないものについては保存箱に入れて保存することとした。一方、水損している公文書は泥水を吸い、カビの繁殖も見られるため、劣化状況によってはエタノール水溶液による洗浄ののちに乾燥させることとなった。多くのボランティアが駆け付けたため、搬出班と洗浄班に役割を分かれて作業を行った。筆者と吉原大志氏は他の屈強な「荒くれ者」とも言うべき面々とともに、永年書庫内部での搬出作業(いわゆる「蔵出し」)を担当した。搬出に当たっては棚ごとの番号付与をし、写真の撮影をして、現状を記録した。例えば、書庫7連目、手前から2列目、上から3段目であったなら「7-2-3」とA4用紙にマジックで記して、それをキャプションとして撮影し、そのまま公文書とキャプションをテンバコに載せて搬出した。一棚分が一度に搬出できるわけではないので、適宜左から右にかけて「7-2-3①」「7-2-3②」と分けた。



常総市役所被災公文書

水損を免れた公文書の搬出はあまり問題がなかったものの、水損公文書は泥水を吸い込み重くなった上に、膨張して取り出しにくい状態であった。そして何より強烈な臭気とカビに苦労した。文化財レスキューのために愛用している筆者自身の米軍軍服が泥だらけになったことは言うまでもない。その後の何日かの作業で搬出作業は終了したが、帰りがけに毎回立ち寄った某チェーン居酒屋で、着替えたとはいえ泥にまみれた安全靴を見た店員が「ご苦労様です」と優しく声をかけてくれたものの、営業妨害にならなかったものかといまでも案じている。なお、洗浄作業は現在でも定期的に行なわれている。

常総市公文書レスキューの初動の円滑な救援要請や組織連携などについては、他地域における同様の活動でも参考になる点が多いが、紙幅の都合や筆者はその任にないものと思われるので、ここでは割愛したい。常総市役所内の公文書保全については多くのボランティアや常総市職員の不断の努力の賜物によるところが大きい。一日も早い復旧を願うとともに、当館は今後も常総市公文書の保全活動に努めていきたい。

(なお、本稿は人間文化研究機構広領域連携型基幹研究「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」国文研ユニット「人命環境アーカイブズの過去・現在・未来に関する双方向的研究」(代表 渡辺浩一当館教授)の研究成果の一部である。)

(西村 慎太郎)

UCBにて初めて「古典籍ワークショップ」を開催 —三井写本コレクション調査とともに—

平成28年3月7日(月)から11日(金)までの5日間、当館館長・今西祐一郎、同教授・^{かんさく}神作研一、同准教授・入口敦志・^{うんの}海野圭介・小山順子の5名で、カリフォルニア大学バークレー校(以下、UCBと略す)のチェスター・ピーティー・スター東アジア図書館(C.V.Starr East Asian Library)において、三井文庫写本の調査を行いました。

カリフォルニア大学が三井家から蔵書を購入したのは昭和25年、その後、三井文庫は『国書総目録』では「旧三井」と記載される「幻の文庫」となったのです。三井文庫はUCB東アジア図書館で公開されており、昭和32～33年の^{ちかお}小倉親雄氏による写本調査など、個人による調査の機会があったとはいえ、未整理で閲覧が可能な状態にはありませんでした。悉皆調査に着手したのが、昭和58年9～10月、科学研究費(海外学術調査)を受け、国文学研究資料館から長谷川強・渡辺守邦・伊井春樹・日野龍夫の四氏が行った文庫調査です。長谷川強「海外資料調査-旧三井文庫本-」(『国文学研究資料館報』第22号、昭和59年3月)、伊井春樹「バークレー校蔵旧三井文庫本調査始末記」(『調査研究報告』第5号、昭和59年3月)、渡辺守邦「カリフォルニア大学バークレー校旧三井文庫本調査の報告」(『文学』第52巻8号、昭和59年8月)を読むと、調査の折の苦労や四氏の熱っぽい様子が伝わってきます。この際の調査をもとに、「カリフォルニア大学バークレー校旧三井文庫写本目録稿」(『調査研究報告』第5号、昭和59年3月)の目録が作成され、閲覧が可能となりました。その後、岡雅彦「カリフォルニア大学バークレー校旧三井文庫写本目録稿追加」(『調査研究報告』第8号、昭和62年3月)、「カリフォルニア大学バークレー校旧三井文庫蔵御会関係資料細目稿」(『調査研究報告』第9号、昭和63年3月)が、最初の目録を補うものとして出されています。さらに、地図・版本の整理もスタートし、岡雅彦・児玉史子・戸沢幾子・石松久幸『カリフォルニア大学バークレー校所蔵三井文庫旧蔵江戸版本書目』(ゆまに書房、平成2年)も刊行されました。現在では、一部の稀本・善本は撮影されてマイクロフィルムが当館に所蔵されており、閲覧調査ができます。

かつては海を隔てた遙か遠い「幻の文庫」であったことを思うと、現在のように閲覧調査が可能になったのは、UCB東アジア図書館と当館の協力の賜物であると感慨深いものがあります。そもそも戸越の三井文庫の跡地に、移転前の国文学研究資料館が建てられていました。三井文庫と当館の縁は深いのです。なお、UCBチェスター・ピーティー・スター東アジア図書館は、平成27年度に当館と学術交流協定を結んでいます。そして現在、UCB東アジア図書館および三井文庫と当館との結びつきから、新たなプロジェクトとして、調査および現地の日本研究者に向けたワークショップの企画が立ったのです。なお古典籍ワークショップは、今回が初の試みでした。

7日(月)～10日(木)の4日間の調査では、上記「カリフォルニア大学バークレー校旧三井文庫写本目録稿」をもとにした悉皆調査とともに、所蔵資料の貴重度・重要度を見極めてゆきます。短時間のうちに多くの本を調査する中で、十分な紹介のなされていない優れた本がまだまだ存在することに、興味は尽きません。

3月11日(金)は、チェスター・ピーティー・スター東アジア図書館内の一室で、古典籍ワークショップが開かれました。UCBおよび近隣の研究機関で、日本文学または周辺分野の研究に携わる教員や大学院生、図書館司書など、約30人が参加しました。UCB日本学研究所所長ダナ・ブントロック(Dana Buntrock)氏、チェスター・ピーティー・スター東アジア図書館館長ピーター・ズー(Peter Zhou)氏、国文学研究資料館館長・今西祐一郎による挨拶の後、准教授・入口敦志から「歴史的典籍に関する大型プロジェクトについて」の説明をいたしました。歴史的典籍の画像インターネット公開に対する関心は高く、参加者から様々な質問や意見が出ました。また古典籍に関する概説的発表として、今西「板本『職原抄』について」、神作「江戸の写本文化」がありました。その後、チェスター・ピーティー・スター東アジア図書館日本語資料司書のマルラ俊江氏により、「UCバークレー所蔵三井写本コレクションの概要」があり、UCB所蔵三井写本コレクションの成り立ちや、コレクションごとの特色についての概要説明がありました。続いて、神作・入口・小山・海野の4人によって、今回調査した資料の中で、特に注目すべきものを取り上げた報告を行いました。それぞれがまず、資料の特徴やみどころをパワーポイントを用いて解説し、各々のプレゼンテーションの後に、取り上げた資料を実際に手に取り見てもらうという試みでした。我々が報告の中で取り上げた箇所を、原本に触れ、自分自身の目で確認するという体験を通じて、原本のみが持つ力を体験していただけたという手応えを得ることができました。

ワークショップ終了後、場所をWomen's Faculty Clubに移動し、レセプションが開かれました。参加者たちは、それぞれにワークショップの感想を述べて下さいました。参加者たちの身近にある図書館に、このような素晴らしいコレクションそして貴重な資料があることを「発見」した喜びや、それを活用するためには書誌学やくずし字への習熟が重要であるという意識を、複数の参加者から聞くことができました。非常に有意義な企画であった

と、満足感を胸に帰国いたしました。調査およびワークショップは、今後も継続してゆく予定です。

末筆になりますが、前回の調査に引き続き、今回の調査・ワークショップで様々な面からお気遣い、ご助力いただきました、カリフォルニア大学バークレー校チェスター・ビーティー・スター東アジア図書館日本語資料司書のマルラ俊江氏に、改めて深く御礼申し上げます。

(小山 順子)



古典籍ワークショップ



参加者とともに原本に触れる

連続講座 「くずし字で読む『百人一首』」

毎年ご好評をいただいています当館の連続講座は、昨年度から引き続き、今年度も「くずし字で読む『百人一首』」を開催しております。昨年度は1番の天智天皇から38番の右近までを取り上げましたので、今年度は39番の参議等から70番の良暹法師まで、各回4首ずつ、当館教員によって順番に取り上げて講義を行います。

なお、昨年度は毎月第四木曜日の開催でしたが、今年度は5～10月の6ヶ月間で全8回、また曜日は水曜日に変更となりました。

『百人一首』は、よく知られているとおり、万葉時代から鎌倉時代初期までに詠まれた和歌の中から、藤原定家を選び出した百首です。宇都宮頼綱（うつのみや・よりつな、定家の息子・為家の妻の父）の求めによって、嵯峨の別荘の襖を飾る色紙に書く和歌を選んだものと言われており、そのため「小倉山庄色紙和歌（おぐらさんそうしきしわか）」とも呼ばれていました。現代では主にカルタとして楽しまれています。『百人一首』は和歌および古典の初学書として読まれ、親しまれてきたものです。くずし字に初めて触れる上でも、最適な作品でしょう。

テキストは、江戸時代中期の安永4年（1775）に刊行された、『錦百人一首あづま織^{にしき}』を使用します。江戸時代の浮世絵師・勝川春章（かつかわ・しゅんしょう、1726 - 1792）が歌仙絵を描き、猿山周之（さやま・しゅうし）が書をしたためた本です。本書は、美しい歌仙絵が特徴で、人気を博し、明治時代まで種々の版が刊行されています。鮮やかな彩色画とともに、それぞれの和歌をくずし字で読み、また歌を読み解く楽しさを味わっていただきたいと思います。

今年度の講師をつとめます当館の教員は、和歌に限らず、それぞれに異なる分野を研究しています。受講者の皆様にも、多様な切り口から『百人一首』の世界を楽しんでいただければと思います。

(小山 順子)

担当講師

1. 5月 25日 小山 順子
2. 6月 8日 入口 敦志
3. 6月 22日 落合 博志
4. 7月 27日 小林 健二
5. 8月 24日 相田 満
6. 9月 14日 ダヴァン デイディエ
7. 10月 12日 伊藤 鉄也
8. 10月 26日 寺島 恒世



『近世大名のアーカイブズ資源研究』とアーカイブズ活動

記録史料を保存公開する機関の資源研究とはどうあるべきか。『近世大名のアーカイブズ資源研究』（思文閣出版社、2016年3月）は、この点に関する実践的研究の試みです。分析対象には松代真田家文書を取り上げました。

松代藩・真田家文書は、国文学研究資料館（以下「国文研」）に5万5000点余、真田宝物館に1万7000点余と二分されて伝存します。これらの目録作成は、国文研収蔵分の目録刊行（全12冊）を終え、真田宝物館所蔵分は詳細目録の整備が進行中です。また、松代藩御用達商人を務めた国文研所蔵松代八田家の目録刊行（既刊8冊、件数2万1892件）が続き、近年、真田家文書などを利用した研究が急速に増えています。研究分野は、大名研究、藩政研究、地域・村落研究、江戸研究、幕府勤役・役職研究、地震研究、財政・経済史研究、学芸文化研究などさまざまです。これは近世大名文書群が当時の政治システムや地域社会・学芸なども含むもっとも総合的な記録史料群であるためです。

国文研（元文部省史料館、国立史料館）は、この真田家文書群に関わって様々な作業を行ってきましたが、もっとも大きな取り組みは、この目録整備とその前提となるモノそのものの管理の仕組みを整えたことであると思います。それによって一般公開が実現し、研究などでの利用が進化したわけです（その他に『史料館叢書』『史料叢書』などでの史料翻刻公開（家臣団家譜史料を含む）、一部画像を掲載するデータベースの公開などがある）。

民間に所在する文書などを記録史料（アーカイブズ）として保存公開する取り組みが本格するのは戦後のことであり、全国的な活動となりました。記録史料は、不特定多数の利用者を前提に成立したモノでなく、年次や発信者、内容が不明なモノ、また、基本的な情報を完備していても作成・発信者、受信者の性格などが曖昧なモノもあり、近代以降の書誌情報を完備する図書などとは取り扱いの考え方を異にするため、目録作成などは独自のものとして発展してきたといえます。

現在では、たとえば近代の組織の文書であれば、組織構造を踏まえて、総務課の文書、会計課の文書というように部署やその機能を単位に編成する方法が、記録史料の価値を見出す上でも重要とされています。この方法であれば、基本情報を欠く文書であっても、各部署や係との関わりのなかで捉えられるため、内容理解が容易となります。もし、組織構造を無視して主題分類を行うと、とくに基本情報を欠く文書などでは、その価値を適切に理解することが難しくなかねません。なお、一般に基本情報を欠く文書は、メモ書きなどを連想し、価値が低いと考えがちですが、前近代の文書では、とくに身分内の文書書式として広範な利用を確認できます。後世に設定された分類基準で編成することの危うさがここに 있습니다。そのため、アーカイブズ学では、時代を問わず発見した時点での文書のまとまりなどに注意することが極めて重要とされています。

ところで、全体像の理解では、文書群のまとまり情報を温存・記録することのみでは不十分です。記録を発生・蓄積させた団体・組織の組織構造の検討と、その成果を踏まえた記録類を部署単位で捉える分析が重要です。関連して当時の稟議システムや記録管理システムなどの検討も必要です。

作業はジグゾーパネルを組み立てるような取り組みということもできるでしょう。個々の文書の位置を役割・機能との関わりのなかで捉え、全体の中に位置づける作業ともいえます。そして、完成したジグゾーパネルは、基本目録として整備されねばなりません。それは史料個々の情報と、史料相互の関係を示す情報を表示するものとなるわけです（一覧性に優れる冊子体の目録は媒体として現在のところもっとも相応しいといえます）。

記録史料群の資源研究に関わるもっとも基本的な研究は、以上のような手続きを踏まえた全体像の分析にあり、『近世大名のアーカイブズ資源研究』は、藩内外の部局のあり方と記録との関係、藩主を中心とする印章利用、記録の伝来などの分析を進め、基本的な情報の整備と高度化を目指しました。すでに史料目録は刊行されていますので、目録情報を補強し、利用者の便を計る取り組みということになります。

多くの方にご覧いただき、保存公開機関におけるアーカイブズ資源に関する基本的研究のあり方として受け入れられ、真田家文書などを利用する研究の進展に益することを期待します。

なお、本研究は、真田宝物館の皆さんをはじめとする研究者との共同作業を通じて進められました。執筆は、原田和彦・太田尚宏・宮澤崇士・岩淵令治・西村慎太郎・渡辺浩一・種村威史・福澤徹三・大友一雄・降幡浩樹・福田千鶴・山中さゆり・工藤航平によります。（大友 一雄）



＜国文学研究資料館展示室より＞ 特設コーナーにご注目を！

当館展示室では、通常展示、特別展示などを開催しており、その一角に展示ケース4台を使用した『特設コーナー』を設け、主に新収資料を中心に一つのテーマに絞った展示をしています。

今年の4月から6月にかけては、鉄心斎文庫から寄贈を受けた千点余りの伊勢物語コレクションのうち、ごく一部を展示し、多くの方々にご来館いただきました。

特設コーナーは、約2ヶ月に一度展示替えを行います。今後もぜひご注目ください。



特設コーナー「伊勢物語そろいぶみー鉄心斎文庫コレクション」の様子

平成28年度 特設コーナー展示スケジュール

期 間	テ ー マ
4月14日(木)～6月4日(土)	伊勢物語そろいぶみー鉄心斎文庫コレクション
6月20日(月)～7月12日(火)	新収の春日懐紙
7月14日(木)～9月13日(火)	松代藩・真田家のアーカイブズ
9月15日(木)～10月25日(火)	片仮名本と平仮名本
10月27日(木)～11月29日(火)	源氏物語 画帖と古写本
12月1日(木)～12月17日(土)	眞山青果旧蔵資料展 -その人、その仕事-
1月16日(月)～1月24日(火)	
1月26日(木)～3月21日(火)	新古今和歌集とその周辺

※展示室開室時間：午前10時～午後4時30分（入場は午後4時まで）

日曜日・祝日、8月12日～16日、展示室整備日（詳しくはホームページでご確認ください。http://www.nijl.ac.jp/）

※平成28年4月より土曜日も開室しております。

平成28年度 国文学研究資料館「古典の日」講演会

古典の日は国民が広く古典に親しむことを目的として、平成24年3月に法制化されました。11月1日に定められたのは、我が国の代表的な古典作品である『源氏物語』の成立に関して、最も古い記述が寛弘五年（1008）11月1日であるためです。

当館は、「古典の日」の趣旨に賛同し、平成24年度から記念の講演会を催しております。古典に親しむ絶好の機会となりますので奮ってご参加ください。

日 時：平成28年11月3日（木・祝） 13時30分～16時00分
（開場：12時30分）

会 場：イイノホール（東京都千代田区内幸町2-1-1 飯野ビルディング）
・東京メトロ 日比谷線・千代田線「霞ヶ関」駅 C4出口直結

講 師：

- 1 今西 祐一郎（日本古典学・国文学研究資料館館長）
- 2 小山 順子（和歌文学・国文学研究資料館准教授）

聴講料：無 料

※事前申込が必要です。お申し込み方法については、当館 Web サイト（http://www.nijl.ac.jp/）をご確認ください。

申込締切日：平成28年9月12日（月）必着

※当選者の発表は、**10月中旬までの受講票の発送**をもってかえさせていただきます。

お問い合わせ先：TEL：050-5533-2910 E-mail：kikakukoho@nijl.ac.jp



昨年度「古典の日」講演会の様子

第40回国際日本文学研究集会 The 40th International Conference on Japanese Literature

当館では、日本文学研究者による研究発表・討議により、広い視野からの日本文学研究の進展を図り、研究者相互の国際交流を深めるため、国際日本文学研究集会を開催しています。

平成28年度は、以下のとおり開催します。

- 日 程** 平成28(2016)年11月19日(土)～11月20日(日)
- 主 催** 大学共同利用機関法人人間文化研究機構 国文学研究資料館
- 会 場** 国文学研究資料館
- 内 容** ①研究発表
②ショートセッション発表
③ポスターセッション発表
④特別講演
※研究発表者及び研究発表表題については、9月下旬頃までに決定し、プログラムを当館ホームページにて公開する予定です。

使用言語 日本語・英語

- 参加要領**
- ・参加費：無料
 - ・参加資格：日本文学に関心のある者(研究者・大学院生・学生・留学生など)
 - ・申込み方法：参加の受付は当日会場で行います。

(問い合わせ先)

国文学研究資料館 国際日本文学研究集会事務局

〒190-0014 東京都立川市緑町10-3

TEL：050-5533-2911

FAX：042-526-8604

E-mail：icjl@nijl.ac.jp



平成27年度研究発表



平成27年度ポスターセッション

総合研究大学院大学の近況

○平成28年度入試説明会

平成28年10月15日(土)13時30分から、平成29年度入学希望者を対象とした入試説明会を開催します。

詳細は、当館 Web サイトの「総研大日本文学研究専攻」のページでご確認ください。

<http://www.nijl.ac.jp/~kyodo/soken.files/enter/seminar.html>

当日は入口准教授による特別講義も開催いたします(入学希望者以外の方もご参加いただけます)。

多数のご参加をお待ちしております。

＜開催概要＞ 日 時：平成28(2016)年10月15日(土)13:30～17:00

会 場：国文学研究資料館(東京都立川市緑町10-3)

内 容：専攻や入試についての説明、施設見学など

○平成27年度学位記授与式

平成28年3月24日(木)に、平成27年度の学位記授与式が葉山キャンパスにて執り行われ、当専攻の黄昱さんに学位が授与されました。

○平成28年度入学式

平成28年4月4日(月)に、平成28年度入学式が葉山キャンパスにて開催され、当専攻の新入生である小野光絵さんが出席しました。



左から 今西館長、黄さん、山下専攻長、相田准教授

○学長・理事との意見交換会

平成28年5月19日(木)に、国文学研究資料館において学長・理事との意見交換会が開催されました。

この意見交換会は、「普段はなかなか聞くことができない現場の声を聞き、大学運営に反映させたい」との学長のご意向により実施されたもので、今年度中にすべての専攻を訪問する予定になっています。

当専攻は4月に実施した遺伝学専攻(国立遺伝学研究所)に引き続き2箇所目の訪問で、岡田学長、長谷川理事、永山理事が来館されました。

学長から法人第3期の機能強化構想に関する活動についての話題が出されたこともあり、当館で実施している「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」事業が、まさに異分野融合研究であり、同事業において総研大の学融合共同研究「オーロラと人間社会の過去・現在・未来」(研究代表者：極域科学専攻・片岡龍峰准教授)とも共同研究を実施していることから、基盤機関である国文研の研究と総研大の日本文学研究専攻としての研究活動との関係性や今後のあり方などについて特に活発な意見交換が行われました。



左から 永山理事、長谷川理事、岡田学長

8月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

9月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	

10月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23/30	24/31	25	26	27	28	29

- 開館：9：30～18：00 ● 請求受付：9：30～12：00, 13：00～17：00 ● 複写受付：9：30～16：00
- ただし、土曜開館日は、
- 開館：9：30～17：00 ● 請求受付：9：30～12：00, 13：00～16：00 ● 複写受付：9：30～16：00

大学支援「国文研でゼミを」 大学教員の皆様へ

学部・大学院で行っているゼミや講義を国文学研究資料館で行いませんか。豊富な所蔵資料を手に取りながら、ゼミ等を行うことができます。ぜひご利用ください。

◆申込み 当館 WEB ページまたはEメールより。

詳細は当館 WEB ページをご覧ください。

<http://www.nijl.ac.jp/pages/event/seminar/univ/shien.html>



表紙絵資料紹介

短冊手鑑「筆陳」

短冊手鑑「筆陳」は長府毛利家の旧蔵と伝える上下二帖の大部な手鑑で、昨年度に当館収蔵となった。短冊の脇に貼られた極札によれば、後宇多天皇（1267—1324）以下の天皇・公家・武家・能筆・僧侶・連歌師・芸能者など1176枚の短冊を取める。現在、当館において共同研究を行っており、全容の解明には今少し時間がかかるが、下記のような短冊が収められており、短冊の書式と料紙装飾の歴史を考える上でも貴重な資料である。

図1 三条実任（1264—1338）の短冊。実任は鎌倉時代後期の公卿。「為世勸進春日社三十首歌」「文保百首」などに詠進し、『続千載和歌集』以下の勅撰集に入集する。短冊を用いて和歌が詠まれるようになる時代の短冊で料紙は装飾のない白紙。文字造形は縦長でこの時代の特徴を示す。

図2 後崇光院・伏見宮貞成親王（1372—1456）の短冊。貞成親王は伏見宮崇仁親王の子で世襲親王家である伏見宮を継いだ。その男・彦仁親王が後小松天皇の猶子となって踐祚し後花園天皇となったため、太上天皇の尊号を受けた。法号道欽。料紙は天に青、地に紫の打曇料紙。鎌倉時代末あたりから用いられた料紙で、以後短冊の定型として長く利用された。文字の形は扁平で細く丸みを帯びた筆線が特徴的。

図3 細川幽斎（1534—1610）の短冊。幽斎は戦国時代から江戸時代初期の大名。はじめ室町幕府に仕え、その後、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康に仕える。武家でありながら三条西実枝（1511—79）から古今伝受の秘伝を相伝した当代を代表する文化人。料紙は金銀で霞や水辺の情景を描いた豪華なもの。桃山時代に多く用いられた。文字は細い線で構成され、丸みを帯びた穏やかな造形。（海野 圭介）



図3 図2 図1 短冊手鑑「筆陳」上帖



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館
 〒190-0014 東京都立川市緑町 10-3
 Tel:050-5533-2910 Fax:042-526-8604

発行日 平成28（2016）年8月1日
 編集 国文学研究資料館広報出版室
 印刷所 睦美マイクロ株式会社
 ©人間文化研究機構国文学研究資料館